

# トマトハモグリバエの発生生態と殺虫剤感受性

京都府病害虫防除所 **徳丸** **晋\*** **栗田** **秀樹** **林田** **吉王** **石山** **まさひろ**  
 京都府農業総合研究所環境部 **福井** **まさお** **正男**

## はじめに

トマトハモグリバエ *Liriomyza sativae* BLANCHARD は、1999年に日本で初めて発生が確認された(岩崎ら, 2000)。その後、本種は急速に分布を拡大している(徳丸・阿部, 2001)。本種は寄主範囲が非常に広く、特にこれまでハモグリバエの被害がそれほど問題とならなかったウリ科作物で多発する(徳丸・阿部, 2001)。また、本種は1990年に日本に侵入定着したマメハモグリバエ、土着のナスハモグリバエと形態および加害様式が類似しており、識別が非常に困難である(岩崎ら, 2000)。京都府内の施設栽培トマトでは、これら3種が同時に発生した事例がある(Abe and KAWAHARA, 2001)。

これまでマメハモグリバエには10種の殺虫剤が農業登録されている。しかし、トマトハモグリバエに対してはシロマジン液剤とスピノサド水和剤のみである(2002年5月10日現在)。また、本種の日本産個体群の各種殺虫剤に対する感受性については不明である。

ここでは、我が国におけるトマトハモグリバエの発生生態の現状と各種殺虫剤に対する感受性試験結果について述べたい。

## I 発生生態

### 1 国内における地理的分布

トマトハモグリバエは、1999年に沖縄県、山口県、京都府において我が国で初めて発生が確認された(徳丸・阿部, 2001)。本種の分布は2000年には九州、近畿地方、2001年には中国、四国、東海、関東甲信越地方にまで広がった。2002年5月10日現在、1都2府30県で本種の発生が確認されている(図-1)。京都府内では、2000年に府内のほぼ全域で本種の発生が確認された(徳丸・阿部, 2001)。マメハモグリバエは、我が国で初めて発生が確認されてから3年後に1都1府16県に広

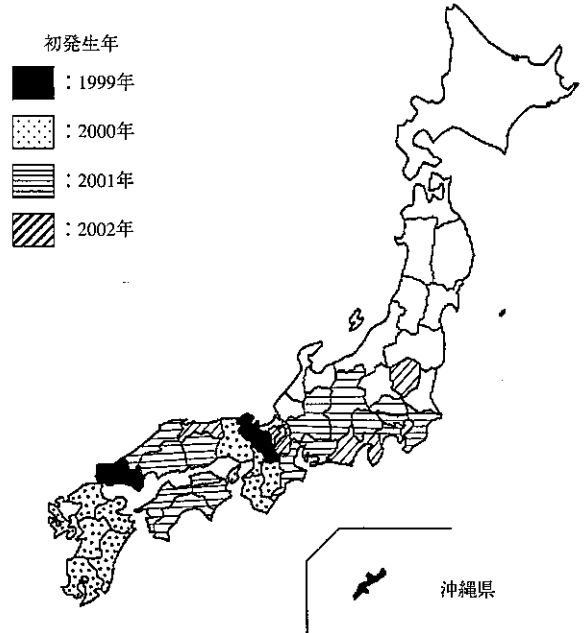


図-1 トマトハモグリバエが分布する都府県の初発生年(2002年5月10日現在)

がった(西東, 1993)。

### 2 発生消長

トマトハモグリバエは1999年および2000年には京都府向日市の施設トマトで春期に発生せず、8月から12月まで断続的に発生した(Abe and KAWAHARA, 2001; 徳丸・阿部, 2001)。しかし、2001年には本種の発生が5月から始まっており、本種が加温設備の整った施設内で越冬し、府内に定着した可能性が高い。

トマトハモグリバエは、京都府向日市の施設トマトにおいて1999年にはマメハモグリバエおよびナスハモグリバエと、同時に発生していた(Abe and KAWAHARA, 2001)。しかし、2000年にはマメハモグリバエとナスハモグリバエの個体数が急激に減少し、トマトハモグリバエが優占種になった(徳丸・阿部, 2001)。2001年にはマメハモグリバエが全く見られなくなり、ナスハモグリバエもさらに少なくなった。マメハモグリバエとナスハモグリバエが減少し、トマトハモグリバエが優占的になった原因は不明である。

Biology and Insecticide Susceptibility of the Vegetable Leaf-miner *Liriomyza sativae* BLANCHARD. By Susumu TOKUMARU, Masao FUKUI, Hideki KURITA, Yoshikimi HAYASHIDA and Masahiro ISHIYAMA

(キーワード: トマトハモグリバエ, マメハモグリバエ, ナスハモグリバエ, 殺虫剤感受性, 地理的分布)

\*: 現在 京都府農業総合研究所環境部